

私にとっての「物性研究」は、なんとなく同人誌的な風体の緑色の冊子のあれである。大学院生のときには毎号食い入るようにながめていた。というのは言い過ぎとしても、当時開かれた研究会の議事録や集中講義の講義ノート、話題になった論文の解説、そして修士論文を知ることがインターネットの利用が最近のように簡便でない時代には貴重な情報源であった。たとえば修士論文は当時の日本基準を示していたはずである。「修士論文たるものこのレベルであるべし」というわけである。この意味で目指すべき一定のラインを目の当たりにすることは大いに刺激になり、プレッシャーになり、そして大きくへこんでいた記憶が残っている。今考えると、よりすぐりの自信作が掲載されるわけで、基準としては高めの設定なのかもしれないが、それでも研究室や大学の単位ではなく、物性研究の分野が共有するこの情報は形にならない文化の一つと個人的には考えている。最近、自分の学生も含めて修士論文の物性研究への投稿を躊躇することが多い。一つは著作権の問題がある。学術論文出版後の問題は緩和されてきているようにも思われるが、投稿前の論文は気になることも多いだろう。学振や各種奨学金制度などの現実的な問題はわからなくもないが、シニアな研究者が世知辛くしていることが若い大学院生にも伝染しているかと思うと気の毒にもなる。それから、昔はもっと丁寧なレビュー主体の修士論文がたくさん載っていたのに、その類も最近は少ない気がする。White の密度行列くりこみ群が出たすぐあとに公開された某氏の修士論文は、後に専門家から優れた邦文解説書と言われるほどであった。必ずしも研究成果の共有だけが研究を支えているわけでないことを多くの研究者は気付いているはずである。一般の学術雑誌とは一線を画する物性研究の特徴を活かしたいところである。

同じような傾向は「研究会の議事録」にもみてとれる。今、部屋にある物性研究を見なおしてもわかるのだが、最新の研究成果とともに「現時点での理論的困難点」や「次に解くべき問題」が堂々と議論されていることが多い。わかったことではなくて、「わからないこと」が述べられているわけである。これは若手から見ると、少なくとも当時の自分には、非常に刺激的に見えた。物性研究の多くは物質の個性の豊かさに魅了されて集まってきた研究者集団によって構成されているはずだが、それが行き過ぎるとバラバラになってしまう。あの人気グループが空中分解しなかったのは、多くのファンに支えられたことが一つの要因になっているように思う。きっと、物性研究分野も共通の普遍的な問題を時折意識しながら、多くの若手研究者とその卵を魅了していく必要があるのだと思う。

とりあえずは自分の学生に修士論文を投稿してもらうように相談しよう。まったく何のメッセージもない駄文になってしまい失礼しました。最初は、中学高校物理に現れるフレミングの法則にまつわる最近知った豆知識について記そうとしたが、そちらの方がよかったかもしれない。

(KH)